

## 切花用ストック カッツ・シリーズ

学名: *Matthiola incana*

種子粒数の目安: 約600粒/グラム

### プラグ生産ステージ

#### 培地

水はけがよく、ピート主体の新しい用土を使用。土壌 pH は 5.5 から 6.2、また EC 値は 0.75mmhos/cm(2:1)以下が適正

#### 播種

ストックのプラグ生産には、406 穴ないしこれに近いサイズのトレイを用いる。種子への水分を維持させるため、粗めのパーミキュライト等で軽く、あるいは通常の厚みで覆土する。およそ 3、4 日で発芽する

ステージ 1(幼根発生の段階) - 発芽にはおよそ 3、4 日要する

**温度:** 発芽温度は 20-24°C が適正。24°C を超得ると、苗がやわらかくなり、徒長が誘発され、また立ち枯れなどが起こりやすくなるので、温度管理には注意が必要

**光条件:** 発芽時に光は不要

**水分:** ステージ 1 では、培地はやや湿潤(level 4)の状態を維持

**湿度:** 幼根が発生するまでは相対湿度を 95-97%に維

ステージ 2(幼根発生から子葉展開の段階)

**温度:** 昼間は 15-21°C が、夜間は 13-15°C が適正

**光条件:** ステージ 2、3 では 26,900 ルクス(2,500 f.c.)までが適正な光条件

**水分:** ステージ 2 では培地を中くらい(level 3)か、やや湿潤(level 4)を維持する

**肥料:** レート 1(100ppm(N)以下、EC 値が 0.7ms/cm)で、リン酸分の低い硝酸態の肥料を与える。培地は、pH が 5.8 から 6.2、EC 値が 0.5-0.7 ms/cm(2:1)で維持する

ステージ 3(子葉展開から本葉展開の段階)

**温度:** 昼間は 15-21°C が、夜間は 13-15°C が適正

**光条件:** 26,900 ルクス(2,500 f.c.)を維持

**水分:** かん水の直前には培地の表面が薄茶色に乾くような、やや乾いた状態(level 2)を維持する

**肥料:** ステージ 2 の肥料をレート 2(100-175ppm(N)、EC 値が 0.7-1.2ms/cm)まで上げる。培地の pH は 5.8 から 6.2、また EC 値は 0.7-1.0ms/cm (2:1)を維持する

**矮化剤:** このステージでは不要

ステージ 4(本葉展開から移植の段階)

**温度:** 昼間は 15-21°C が、夜間は 10-13°C が適正

**光条件:** 温度条件が維持されるなら、53,800 ルクス(5,000 f.c.)までが適正な光条件

**水分:** 培地は中くらい(level 3)を維持。苗は一度しおれると容易には回復しないので、枯らせないように注意する

**肥料:** 左記、ステージ 3 と同じ

**矮化剤:** このステージでは不要

### 八重鑑別について

苗の八重鑑別は可能である。経験によってカッツ・シリーズの場合、鑑別が可能であるが、労務費用が増えるため奨励はしていない。下記の 2 つの方法が鑑別には用いられる。

#### 1) 葉の色調による鑑別方法

八重個体の使用の色は薄緑色で、一重の個体は濃い色調になるので識別が可能である。

子葉が完全に開いた時点(概ね播種後 11、12 日ほど)で、苗を 4-7°C の冷蔵室へ移して、3、4 日間おく。その後、鑑別を行うまで、苗は 10-15°C の涼しい条件におく。冷蔵室へ移す前には、トレイの水分が十分であることを確認する。その間、冷蔵室の中では灯り(光)は不要である。2 日目には、冷蔵室におかれた苗の色調に変化が生じていないかを確認し、もしすでに変化が起こっているようであれば苗を取り出す。冷蔵室から取り出した苗は識別を行うことが可能である。その際には、苗が直射日光や強い光にあたらないようにする。強い日にあたると葉色の差の程度があまり顕著でなくなってしまうので注意する。この作業を行うのは、朝あるいは午前中が最適である。経験によって差はあるが、この方法で 75-85%の精度で鑑別が可能である

もし冷蔵施設の利用が困難な場合は、その際にはハウスの外に放置するか、ハウスの中で低い温度の条件が得られるところ(10-15°C)を選んで、苗が低温にあたるように努める。鑑別にあたってのタイミングや容易性は、どの程度の低温条件を得ることができるかによって異なるであろう

ヨーロッパなどで生産される、いわゆる鑑別可能品種とは違って、この品種は八重と一重の個体の色調の差がさほど顕著ではない。したがってカッツ・シリーズでは、自動鑑別機の使用は得策ではない

## 2) 葉の形態や色調、大きさによる鑑別方法

苗の鑑別は、他にも苗の大きさ、子葉の色調あるいは形態の違いなどからも可能である。播種から7から10日後の時点で、まずはきわめて小ぶりの苗は摘み取ってしまう。次に、薄緑色でだ円の形状をした葉をもつ八重個体のみを選別してする(一重の個体は、葉色がやや濃く子葉の形状の丸みを帯びているのが特徴)。この方法で80-85%の精度で鑑別が可能である

### 定植から出荷まで

#### 培地(土壌)

水はけがよく、ピート主体の新しい用土を使用。土壌 pH は 5.8 から 6.5、また初期の栄養分は中庸とする。培地の水分は普通の条件を維持し、過湿や乾燥になり過ぎないように注意する。過湿に傾くと、根腐病やべト病、また細菌性の斑点病などが発生しやすくなる。一方、乾燥させすぎると、葉枯れや低部の葉にクロロシスが発生しやすくなり、他の感染症などにかかりやすくなるので、同様に注意が必要である。この時に、低部の葉の層に発生したクロロシスの症状が、養分欠乏なのか乾燥によるストレスなのか、またはべト病に起因しているのかを見極めるのは、ひじょうに重要である

#### 植栽密度とネット掛け

平方メートルあたり 120 から 150 株の植え付けが可能。未鑑別のプラグ苗を用いる場合は、菜食密度をより高くする

1 層のネット(15 x 20/cm)による網掛けを奨励

#### 温度

昼間: 15-24℃

夜間: 7-13℃

上記の適正な温度域を維持できるのであれば、株の管理はトンネルハウスでも通常のハウスでも、またハウスの外であっても管理上はとくに問題はない。ただし雨が多くの地域、時期においてはハウスの外で生産してはならない。いわゆる熱帯の高地のような条件で、なおかつ上記の夜間温度域が維持されるのであれば、周年栽培も可能である。上記の温度域よりも低い条件では、生産期間が長くなるであろう

#### かん水

定植後の初期の段階ではふつうに頭上かん水を行い、2、3 週後にドリップ(点滴)かん水へ移行する。培地(土中)の水分を切らさないように注意する。そして、次のかん水時まで土が多少乾くような状態で管理する

#### 肥料

リン酸分の低い硝酸態の肥料をレート 3(175-225ppm(N)、EC 値が 1.2-1.5mmhos/cm)で週に 2 回与える。土壌 pH は 5.8 から 6.5、また EC 値は 1.5-2.0mS/cm(1:2)を維持する。この施肥を収穫時まで続ける

#### 平均的な生産期間

播種から定植まで: 約 4 週

移植から出荷適期まで: 7 から 11 週

播種から出荷適期まで: 11 から 15 週

生産期間は主として生産中の温度条件に拠るところが大きい。短日、低温条件では期間が長くなり、逆に長日で暖かい条件であれば短くなる

#### 予想される病気や害虫

害虫: アブラムシやスリップス、ケムシ類など

病気: べト病、ボトリティスなど

#### 注意点:

- 同品種を生産するにあたって、ここで示されている栽培情報は基本的な参考資料としてお使いください。生産物は、気候条件や地理的な緯・経度、また作型の時期、ハウスの環境によって結果が異なることがあります
- 殺虫・殺菌剤、また矮化剤を用いる場合は、必ずガイドラインによる使用方法を遵守しましょう。当該の規定や条例のもとで、注意書きをよく読み正しく使用することが、使用者の責務です

**注意点:** EC 値(電気伝導度)は、ピート主体の北米の用土を算出の基準としているので、土を用いた配合では適合し得ない場合があります。